浜辺を、短パン姿の集団がランニングをしていて、砂が小高く盛り上がった所がそのコースで、一人だけ彼女はトレパンとジャージで、平坦な場所だけがコースで、ゆっくりと走り、片足を少し引きずり、集団とすれ違う時、ファイトと声を掛け、集団が通りすぎた後、彼女はふらふら彼女のコースから外れ、立ち止まり、砂浜を見詰め、貝殻を収集して、

沖に向かって何人も一斉に泳ぎだし、一斉に溺れだし、助けを求め、何人も一斉に救助に海に飛び込み、みんな無事に救助され、溺れた人はみんな元気に立ち上がり、浜辺のスピーカーから流れていた曲が突然消え、数秒の沈黙の後、ローカルラジオのジングルが流れ、ライフセーバーのかたに聞いてみましょう、今日はどうですか？　と、アナウンサーの問いに、今日は台風の影響で波が高く、遊泳禁止ですと、彼女の声が響き、アナウン

サーが、皆さん、今日は遊泳禁止だそうです、遊泳禁止です、今日はどんな事に注意してますか？

そうですね、今日は波際で水遊びをしていると、何回に一回は大きな波が来て、さらわれてしまいます、見つけたら、なるべく声掛けするようにしています、それが事故を防ぐことになると思うので……、アナウンサーが、どうもありがとうございました、今度は……、突然途切れ、音楽が流れ出し、

朝も晩く、電話が鳴り、彼女は慌てて目玉焼きを皿に取り出し、会社からだと分かると咳払いをして電話に出て、目玉焼きを一口食べた幼稚園年長組の息子は皿をフォークで叩き、カチカチと規則的なリズムを奏で、彼女は息子を睨みつけ、仕事に行かなきゃならなくなったと言うと、息子はテレビを見詰め何も言わず、彼女は電話をかけ、息子は、お婆ちゃんは居た？　と訊ね、彼女は頷き、

ウエットスーツに着替え、テレビを消し、海岸で、彼女は息子を着替えさせ、救助服を付け、ロングボートの先に息子を乗せ、ボードに腹這いになり、パドリングで沖へ出て、波は無く、二人はゆっくりと進み、彼女は、ボードに跨り波を待ち、何回か波に乗ろうし、波は途中で消えてしまい、海の上を二人は漂い、彼女はボードの向きを変え、海から上がり、砂浜に座り、二人は海を見詰め、息子が手を差し出し、彼女は、お婆ちゃんのお家でお留守番しててね、と言い、息子の手を取り、歩きだし、

彼女は、釣れたわ、そう言って、リールを巻き、針から魚を外す時、逃がしそうになり、せっかく釣ったのに、と苦笑し、小走りに左側で釣りをしている老人のボックスに魚を入れ、お父さんの向こう側で釣ろうかしらと、場所を変え、すぐにリールを巻き、魚はかかってはいず、餌を付け直し

投げ入れ、またすぐ、リールを巻くと、魚がかかっていて、老人は竿をたらしたままで、彼女は座り込み竿を支え、海を見詰めたとたん、また、魚がかかり、老人と顔を合わせ、微笑み、

何人かがボディボードで波を待っていて、波が来て、一人だけ波に乗れ、それは小さな少女で、何回か波が来て、少女だけが波に乗れ、お母さんと言う声は波に消され、離れていた所でボディボードに乗っていた彼女は少女と並び、沖に向かい、少女が波に乗ろうとすると、彼女は首を横に振り、何回か波を見送り、何回目かに少女に合図を送り、二人のボディボードはぴったりと横に並び、一緒にテイクオフし、手を繋ぎ、その波の上を、一緒に滑り、

彼女は、立ち尽くし、怖くて何もできないと怯えている自分に驚いて目が覚めた昨日の夢を、波が砕けるのを眺めながら、ふと思い出し、砂を摘ま

み、変な夢だったと、波の音に包まれ、雲の隙間から差し込む日差しの中で、指先から、砂がすり抜け、カラスが鳴き、大きく欠伸をする。